

保田與重郎『日本の美術史』の構造可視化

—日本語文章の絵解き—

谷 口 敏 夫

0 目次

- 1 はじめに
- 2 調査の目的と方法
- 3 文章地図
 3. 1 用語の分類
 - (1) 人名の概略
 - (2) 事項名（社寺・美術品）の概略と分類
 - (3) 用語の傾向
 - (4) 用語の地図化
 3. 2 事項と人物の認定
 - (1) 事項・人物の名寄せについて
 - (2) 事項・人物の概説
- 4 クラスタ分析
 4. 1 事項・人物のクラスタ分析
 4. 2 事項・人物地図に表れた小概念
- 5 まとめ

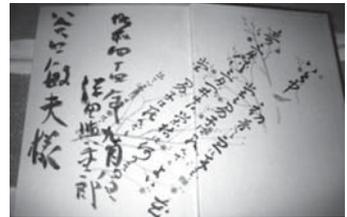
1 はじめに

本論で扱った『日本の美術史』（写真は初版）は評論家保田與重郎が昭和四十三年十二月に新潮社から刊行した。昭和四十一から四十二年にかけて雑誌「藝術新潮」に連載したもので、古墳時代から江戸時代までの美術を扱っている。近代については、『日本の文學史』と同じく昭和の扱いが薄い。藝術新潮連載時には写真が多数あったが、初版ではまとめられていた。また全集や文庫では写真が省かれている。

戦後の保田の著名な業績『日本の文學史』は、この『日本の美術史』の後に出版している。私感では、保田與重郎は確かに「万卷の書」にあたり博識だったが、それよりも「千里の道」を踏破して古寺古美術、風景に親しんだことの方が彼の思想形成に重いものがあるように感じられた。

一つ一つの神社の境内や、寺の薨や、仏像や絵が「美術全集」などで見る先に、憧れるようにこがれるように通って目にした、鑑賞というよりも耽溺した結果が保田の美術史だと思えた。特に奈良、明日香、京都は畝傍中学校、大阪高等学校時代から幾度も出歩き、自分の庭の風景や庭石を愛でるように文章化されている。知識が血肉になった好例だと言える。

本論は、このテキスト中の用語を抽出し、その傾向を分析し文章地図にまとめた。その用語の一つ一つには保田の肉声が宿っているが、恣意に依らない再現性を伴う方法論で分析をした。



2 調査の目的と方法

本論の目的は、日本美術の通史『日本の美術史』を、用語の頻度によって可

視化し、保田の意図した独自の美術観、芸術観の構造を考察することにある。

以下に、テキスト『日本の美術史』の目次を示す。

1. 大倭朝廷時代
 - 01-1 九千年の輝き
 - 01-2 国土の風景
 - 01-3 庭園の源流
 - 01-4 橿原出土縄文土器
 - 01-5 皇大神宮
 - 01-6 機織る少女
 - 01-7 磯城島ノ金刺宮
 - 01-8 巨石の文明
 - 01-9 くづれ落ちた壁画
2. 推古時代
 - 02-1 古墳
 - 02-2 多彩なる造形
3. 白鳳時代
 - 03-1 飛鳥ノ浄御原宮
 - 03-2 色彩の感覚
 - 03-3 白鳳の寺
4. 天平時代
 - 04-1 天平のうつりゆき
 - 04-2 天平の澱み
 - 04-3 天平第一等の仏
 - 04-4 聖武天皇
 - 04-5 乾陀羅びと問答師
 - 04-6 天平の書画
 - 04-7 奈良京の文物
5. 奈良から平安へ
 - 05-1 都遷り
 - 05-2 弘仁の絵画
 - 05-3 弘仁の彫刻
6. 平安時代
 - 06-1 寝殿造り
 - 06-2 物語の仏
 - 06-3 菅公鎖国
 - 06-4 花山院故事
 - 06-5 御堂関白
7. 院政時代
 - 07-1 院政の朝廷
 - 07-2 院政時代の造形
- 07-3 絵巻物
- 07-4 熊野御幸
- 07-5 山越弥陀
- 07-6 東大寺再建
- 07-7 終焉と変革
8. 鎌倉時代
 - 08-1 覇者の感情
 - 08-2 文明の護持
 - 08-3 鎌倉の貧困
 - 08-4 神道の根基
9. 南北朝時代
 - 09-1 主題としての庶民
 - 09-2 敵味方供養
 - 09-3 雲祥の大般若経
10. 室町時代
 - 10-1 神社の建築
 - 10-2 寺院の建築
 - 10-3 書齋
11. 戦国時代
 - 11-1 美術批評の体系
 - 11-2 戦国大名の文物
12. 桃山時代
 - 12-1 桃山の気宇
 - 12-2 祭礼
 - 12-3 大作家時代
 - 12-4 小袖
13. 江戸時代
 - 13-1 江戸の新体制
 - 13-2 宗教の建物
 - 13-3 東大寺復興
 - 13-4 民族造形の流れ
 - 13-5 民衆生活と美
 - 13-6 文人画
14. 近代
 - 14-1 維新と文明開化
 - 14-2 偉大なる混乱
 - 14-3 奉賛鉄齋先生

これを明確にするために、あらかじめ粗く抽出した用語群から、美術関連用語や、固有の寺社名、人名を名寄せし異同をただした。さらに用語間のクラスター分析をし、デンドログラム（樹形図）をつくり、この用語の配列をもとに地図化（注：用語頻度の等高線グラフ）した。地図上にあらわれたパターンをテキストにあたり、小概念として確定した。つまり、図書全体を構成する小さな概念の相互の関連を把握することが、本論の目的である。

使ったテキストは初版ではなく、新学社 2000 年『保田與重郎文庫 18 日本の美術史』とした。総頁が 427 あった。テキスト総量はおおよそ 270000 文字、400 字原稿用紙換算をすると 680 枚の作品である。

3 文章地図

まずテキストから、KT2 システム（注：谷口による）で粗く様々な用語を取り出した。抽出した用語数は 31281 件、その異なり語数は 11951 種となり、用語の繰り返し率は 38.21 % であった。

今回は人名、寺社名、美術品を中心に採取できた。これらに手を加えずに整理したのが、表 1 である。この表からテキストの傾向、語彙、用字用法の全体像がつかめ、そこからより精緻な文章全体の地図ができる。これはテキストの中から用語分布のパターンを可視化することになる。

3. 1 用語の分類

ここでは人名や事項名について、表 1 であらかじめ概略を把握し、さらに後述 3.2 の精緻な名寄せ作業を行うことになる。まず表 1 から、テキストの特徴がいくつか見られたので以下に述べる。

(1) 人名の概略

人名で上位になっているのは五名で、聖徳太子（「太子」は聖徳太子に特定出来た）、聖武天皇、富岡鉄斎（鐵齋先生）、豊臣秀吉（太閤）、岡倉天心（天心先生）である。

表1 用語の頻度 (20 頻度以上の用語、162/11951 異なり)

| 頻度 | 用語 | 頻度 | 用語 | 頻度 | 用語 | 頻度 | 用語 |
|-----|------|----|------|----|-------|----|-------|
| 359 | 時代 | 45 | 美観 | 30 | 偉大 | 23 | 東大寺 |
| 328 | 日本 | 45 | 中心 | 29 | 様式 | 23 | 智恵 |
| 190 | 造形 | 45 | 高貴 | 29 | 傳説 | 23 | 作家 |
| 179 | 文明 | 43 | 庶民 | 29 | 想像 | 23 | 原始 |
| 175 | 歴史 | 43 | 京都 | 29 | 場所 | 23 | 決定 |
| 134 | わが國 | 43 | 遺品 | 28 | 墮落 | 23 | あたりまへ |
| 116 | 美術史 | 42 | 英雄 | 28 | 了解 | 22 | 観音 |
| 106 | 世界 | 40 | 精神 | 28 | 流行 | 22 | 舊來 |
| 95 | 院政時代 | 40 | 人間 | 28 | 判断 | 22 | 氣分 |
| 92 | 考へ方 | 40 | 鎌倉 | 28 | 太閤 | 22 | 無數 |
| 90 | 自然 | 39 | 情緒 | 28 | 政治 | 22 | 風格 |
| 89 | 大和 | 39 | 作者 | 28 | 意識 | 22 | 飛鳥 |
| 86 | 意味 | 38 | 文藝 | 27 | 關係 | 22 | 生成 |
| 85 | 建物 | 37 | 不思議 | 27 | 氣品 | 22 | 正倉院 |
| 80 | 原因 | 37 | 自分 | 27 | 理解 | 22 | 神道 |
| 78 | ことば | 37 | 古墳 | 27 | 素朴 | 22 | 神社 |
| 75 | 美術 | 36 | 萬葉集 | 27 | 石佛 | 22 | 心情 |
| 75 | 天平 | 36 | 發見 | 27 | 規模 | 22 | 江戸 |
| 74 | 日本人 | 36 | 創造 | 26 | 文章 | 22 | 敬虔 |
| 73 | 作品 | 34 | 明治 | 26 | 彫刻 | 22 | 異常 |
| 68 | 生活 | 34 | 風景 | 26 | 大佛 | 21 | 繪師 |
| 68 | 信仰 | 34 | 太古 | 26 | 聖徳太子 | 21 | 傳承 |
| 67 | 民族 | 34 | 象徴 | 26 | 記憶 | 21 | 武士 |
| 67 | 土地 | 34 | 事情 | 25 | 佛像 | 21 | 道長 |
| 65 | 生命 | 34 | 結果 | 25 | 努力 | 21 | 態度 |
| 65 | 建築 | 33 | 影響 | 25 | 存在 | 21 | 充滿 |
| 64 | 繪畫 | 32 | 法隆寺 | 25 | 神話 | 21 | 極致 |
| 64 | 思想 | 32 | 道德 | 25 | 御代 | 21 | 巨石 |
| 62 | 仕事 | 32 | 再建 | 25 | 謙虚 | 21 | 各地 |
| 59 | 藝術 | 32 | 近代 | 24 | 藝能 | 20 | 傳世 |
| 58 | 表現 | 31 | 文明開化 | 24 | 繪卷 | 20 | 佛師 |
| 58 | 朝廷 | 31 | 物語 | 24 | 權力 | 20 | 木彫 |
| 57 | 奈良 | 31 | 聖武天皇 | 24 | 保存 | 20 | 批判 |
| 56 | 民衆 | 31 | 女性 | 24 | 風儀 | 20 | 博物館 |
| 56 | 感動 | 31 | 自覺 | 24 | 南北朝時代 | 20 | 天心先生 |
| 55 | 根柢 | 31 | 永遠 | 24 | 形成 | 20 | 上人 |
| 54 | 傳統 | 30 | 鐵齋先生 | 24 | 近世 | 20 | 技術 |
| 54 | 文物 | 30 | 寫真 | 24 | 王朝 | 20 | 間違 |
| 49 | 觀念 | 30 | 學問 | 23 | 戰國時代 | 20 | 感情 |
| 49 | 東洋 | 30 | 西洋 | 23 | 國民 | | |
| 47 | 太子 | 30 | 我國 | 23 | 雰圍氣 | | |

注：↓マークの説明

| | | | |
|-----|------|------------|---------------|
| 190 | 造形 | 斜、単下線 | 一般的な美術対象用語 |
| 95 | 院政時代 | 斜、網掛け | テキストでの明瞭な時代区分 |
| 89 | 大和 | 斜、部分網掛け | 時代区分用語 |
| 47 | 太子 | 太字 | 固有人名をさす用語 |
| 36 | 萬葉集 | 二重下線、部分網掛け | 固有作品をさす用語 |

聖徳太子は、聖徳太子像や法隆寺との関係も深いですが、保田の文明史観を述べるとき、常に言及される。

聖武天皇は天平（奈良）時代を代表する天皇として、また美術史の上では東大寺大仏殿の発願者として頻度が高い。

富岡鉄齋は本書『日本の美術史』最終章節に「14-3 奉賛鉄齋先生」とあるように、保田は鉄齋への讃辞をこの一節に記している。

豊臣秀吉は、保田がもっとも豪放な芸術として桃山時代をあげ、この時代の芸術の開花は、秀吉の力にあると記している。

岡倉天心は、保田がかねがね思想家として高く評価していたことにもよるが、本書では日本美術院の創設などに天心の芸術への貢献を認めている。

「天心先生が美術院創立時の若ものに歌はせた歌の辭に、堂々男児死んでもよいといふくりかへしがある。かういふ感動の極致、生死元來寂として、無の状態を、創作の極致基盤とせよと教へられたのであらう。

(08-2 文明の護持)

(2) 事項名（社寺・美術品）の概略と分類

表1に表れた高頻度の用語を通観し分類をした。それが表2である。分類の項目は6つにし、「その他」を加えた。各分類内容について以下に説明する。

・日本・文明観 頻度総数 2171

保田は美術史の評価観点を、東洋・日本の文明観に定めた。よって『日本の美術史』は西欧的な芸術分類や美学観に当てはめるのではなく、まず日本の文明観*1を定めそこを評価の出発点とした。大分類「日本・文明観」にはそれに関連する用語を選んだ。「わが國」「自然」のような一般用語であっても、保田の著作では常時その意味する背景が深いのでここに入れた。

*1 保田の時代（昭和初期、戦後）で説明すると、たとえば「奴隸制」の産物かどうかで作品を判別するという極めて政治思想的な美学観があったとする。すると東大寺や大仏は、奴隸が作った物だから意義がないとなる。保田はこのような外の思想による日本への当て嵌めを極端に嫌った。

表2 用語の分類 頻度 20 以上、162 用例 (頻度 7125)

| 日本・文明観 | 美術工芸用語 | 時代区分 | 固有名 | その他 |
|---------|---------|----------|---------|----------|
| 328:日本 | 190:造形 | 95:院政時代 | 47:太子 | 359:時代 |
| 179:文明 | 116:美術史 | 89:大和 | 36:萬葉集 | 106:世界 |
| 175:歴史 | 85:建物 | 75:天平 | 32:法隆寺 | 80:原因 |
| 134:わが國 | 75:美術 | 57:奈良 | 31:聖武天皇 | 56:感動 |
| 90:自然 | 73:作品 | 43:京都 | 30:鐵齋先生 | 55:根柢 |
| 74:日本人 | 65:建築 | 40:鎌倉 | 28:太閤 | 45:中心 |
| 68:生活 | 64:繪畫 | 34:明治 | 26:聖徳太子 | 37:自分 |
| 68:信仰 | 59:藝術 | 32:近代 | 26:大佛 | 37:不思議 |
| 67:民族 | 58:表現 | 24:南北朝時代 | 23:東大寺 | 36:發見 |
| 67:土地 | 54:文物 | 24:近世 | 22:正倉院 | 34:事情 |
| 65:生命 | 45:美觀 | 24:王朝 | 21:道長 | 34:結果 |
| 62:仕事 | 39:作者 | 23:戰國時代 | 20:天心先生 | 33:影響 |
| 58:朝廷 | 37:古墳 | 22:飛鳥 | 342 | 31:自覺 |
| 56:民衆 | 34:風景 | 22:江戸 | | 30:偉大 |
| 49:東洋 | 34:象徴 | 604 | | 29:想像 |
| 45:高貴 | 36:創造 | | | 29:場所 |
| 43:庶民 | 29:様式 | 文藝・学藝 | | 28:墮落 |
| 42:英雄 | 27:石佛 | 92:考へ方 | | 28:了解 |
| 40:精神 | 26:彫刻 | 86:意味 | | 28:流行 |
| 40:人間 | 25:佛像 | 78:ことば | | 28:判断 |
| 39:情緒 | 24:藝能 | 64:思想 | | 28:政治 |
| 32:道徳 | 24:繪卷 | 49:觀念 | | 28:意識 |
| 31:文明開化 | 23:作家 | 38:文藝 | | 27:關係 |
| 31:女性 | 22:觀音 | 31:物語 | | 27:氣品 |
| 30:西洋 | 22:神社 | 30:學問 | | 27:理解 |
| 30:我國 | 21:繪師 | 26:文章 | | 27:素朴 |
| 25:神話 | 21:巨石 | 494 | | 27:規模 |
| 25:御代 | 20:佛師 | 過去想起 | | 25:努力 |
| 24:風儀 | 20:木彫 | 54:傳統 | | 25:存在 |
| 23:國民 | 20:博物館 | 43:遺品 | | 25:謙虚 |
| 22:神道 | 30:寫眞 | 34:太古 | | 24:權力 |
| 22:風格 | 1418 | 32:再建 | | 24:形成 |
| 22:生成 | | 31:永遠 | | 23:決定 |
| 22:心情 | | 29:傳説 | | 23:あたりまへ |
| 22:敬虔 | | 26:記憶 | | 23:雰圍氣 |
| 21:武士 | | 24:保存 | | 22:舊來 |
| 2171 | | 23:原始 | | 22:氣分 |
| | | 23:智恵 | | 22:異常 |
| | | 21:傳承 | | 21:態度 |
| | | 20:傳世 | | 21:充満 |
| | | 360 | | 21:極致 |
| | | | | 21:各地 |
| | | | | 20:批判 |
| | | | | 20:上人 |
| | | | | 20:技術 |
| | | | | 1736 |

・美術・工芸用語 頻度総数 1418

美術・工芸、芸術一般に関係する用語を集めた。「日本・文明観」の一般用語の傾向に比べると、対象内容が鮮明なので頻度総数が減少した。ただし頻度22の「神社」をここに入れたのは、信仰の対象よりも、景観を含めた美的観点からの論述が多かった経験則によるものである。他方、この用語の傾向を全体的に見るための大分類では、「寺」「寺院」はあまりに多く、一般用語扱いとして省いた。

・時代区分 頻度総数 604

大分類「時代区分」に入れた用語は、どの時代に重きをおいた図書であるかを見るためのものである。

この大分類の頻度を眺めてみると、院政時代や大和、天平、奈良時代に入る物が多い。奈良、京都、鎌倉、飛鳥、江戸は時代区分であると同時に地名をさすが、それぞれ都や首都の置かれた所であり、いくつかの時代区分に重複して繰り返されるのでこの大分類に入れた。

・文藝・學藝 頻度総数 494

この大分類は、美術史とは関係が深いですが、それぞれ独立している「文藝・學藝」を別個のものとして、分けた。

・過去想起 頻度総数 360

この大分類は、本論で初めて用いることとした。テキストを精読中に伝承や傳世という用語に特別な感興を味わったことによる。「文藝・學藝」にもこの用語は当てはまる事例はあるが、傳世という用語には「物」が時代を乗り越えて残る点に、「過去想起」という分類項目を作った。

・固有名 頻度総数 342

固有名自体は多数記されていたが、それぞれは頻度1～2のレベルであり、

頻度上位の用語を基に大分類をし、テキストの傾向を見る方法論では、それらを補足出来ない。ここでは単独頻度が20以上を選んでいるので、太子～天心先生までの12用語をこの分類に入れた。

(3) 用語の傾向

表2の分類内容を図1の円グラフにした。この図1から本テキストでの用語頻度の傾向をまとめておく。

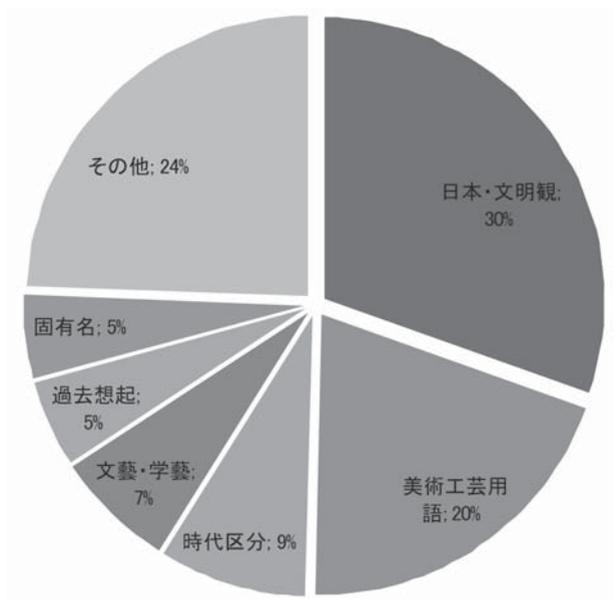


図1 『日本の美術史』用語の傾向

図1はKT2システムで自動抽出した用語31281件（異なり：11951）のうち、頻度が20以上の162用例を荒く大分類したものである。

「日本・文明観；30%」と「美術工芸用語；20%」とで、テキスト全体の半分を占めている。美術史であるにもかかわらず固有名が5%と少ないのは、一つ一つの作品名や人物名は、特例を除いては頻出しなからである。時代区分が

9%と比較的高いのは、日本の美術史を大倭時代から近代までの通史として記した図書からと思われる。

以上で、本テキストの傾向・主調は、日本・文明観に基づく日本美術通史と分かる。

(4) 用語の地図化

図1では、用語の大分類から全体としての傾向を見た。次の図2は表2の各々のテキスト内位置情報と頻度を用いて地図化したものである。

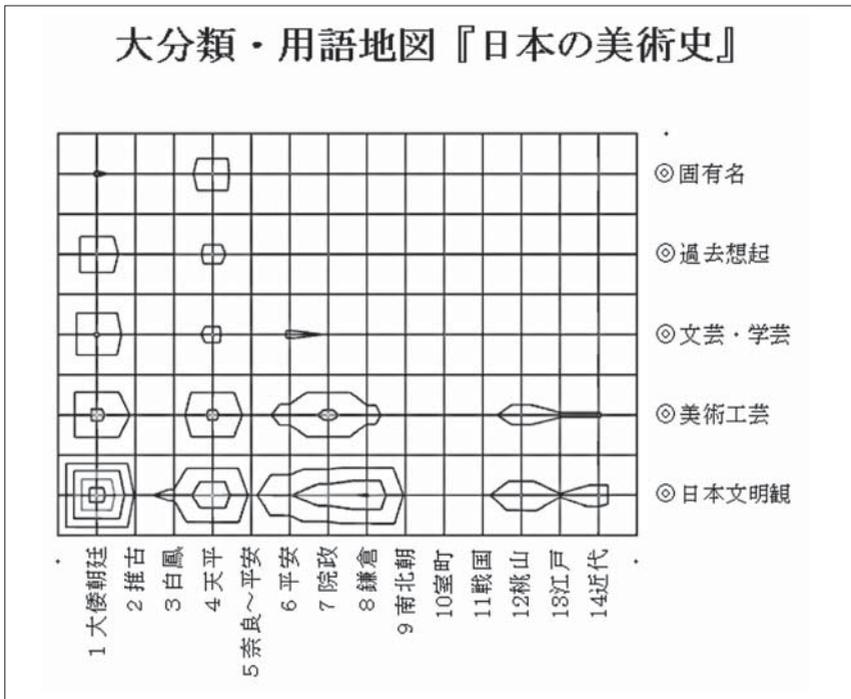


図2 『日本の美術史』 大分類・用語地図

この図2からは、共時的分析として、第1章「大倭朝廷時代」および第4章「天平時代」で右軸の五つの大分類用語群がすべて書き出されている点に特徴がある。

通時的には、基調となる「日本・文明観」と、その対象「美術工芸用語」がほぼ間断なく表れている。基本的な考えが全編を通して表れる一貫性があると言ってよいだろう。

全体として古い時代（下軸の左）に偏っているのは、このテキストの各時代毎での執筆量の違いからきている。各章単位で100%表示をする方法もあるが、本論ではテキストの枠内で絶対的な頻度によって傾向を見るので、それをたとえば時代区分したならば、その区分の容量によって頻度にばらつきがあるのは、自然と考えたからである。第1章大倭朝廷時代は9節あるが、第11章戦国時代は2節しかない。この差は差として保田の考えが含まれている。よって節数の多寡によって枠内で頻度絶対数の差が出るが、それを妥当として本論を進めている。

3. 2 事項と人物の認定

多様な用語を後述する一定の名寄せによって、その上位34件までを表3とした。なお表1の大分類表と数値が異なるのは、ここでは正確な名寄せを行ったからである。また表4は、表3の内訳である。

表3 人物・事項の名寄せ（上位34件）

| 番号 | 事項 | 頻度 | 番号 | 事項 | 頻度 | 番号 | 事項 | 頻度 |
|----|-------|-----|----|-------|----|----|-------|------|
| 1 | {絵画 | 286 | 13 | {物語 | 54 | 25 | {聖武天皇 | 31 |
| 2 | {寺院 | 234 | 14 | {観音 | 53 | 26 | {陶芸 | 30 |
| 3 | {神道 | 194 | 15 | {巨石 | 50 | 27 | {鐵齋先生 | 30 |
| 4 | {天皇 | 181 | 16 | {豊臣秀吉 | 47 | 28 | {藤原道長 | 28 |
| 5 | {東大寺 | 166 | 17 | {城郭 | 43 | 29 | {彩色 | 24 |
| 6 | {建築 | 156 | 18 | {風景 | 43 | 30 | {博物館 | 22 |
| 7 | {仏像 | 153 | 19 | {万葉集 | 41 | 31 | {千利休 | 21 |
| 8 | {彫刻 | 88 | 20 | {文明開化 | 41 | 32 | {天心先生 | 20 |
| 9 | {聖徳太子 | 76 | 21 | {石仏 | 38 | 33 | {大伴家持 | 19 |
| 10 | {芸能 | 68 | 22 | {法隆寺 | 37 | 34 | {祭礼 | 19 |
| 11 | {絵巻 | 59 | 23 | {庭園 | 37 | | {頻度合計 | 2480 |
| 12 | {古墳 | 57 | 24 | {写真 | 34 | | | |

表4 名寄せ内容 (表3の内訳詳細)

| 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 | 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 | 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 |
|----|----|---------|-----|----|----|-------|-----|----|----|--------|-----|
| 1 | | {絵画 | 286 | | d | 錦繪 | 2 | | b | 榮山寺 | 3 |
| | d | 繪畫 | 64 | | d | 宗教畫 | 2 | | b | 藏王堂 | 3 |
| | d | 繪師 | 21 | | d | 肖像畫 | 2 | | b | 觀心寺 | 3 |
| | d | 佛畫 | 15 | | d | 大和繪 | 2 | | b | 黒谷 | 3 |
| | a | 雪舟 | 14 | | d | 町繪師 | 2 | | b | 阿彌陀寺 | 2 |
| | d | 浮世繪 | 10 | | d | 濃繪 | 2 | | b | 園城寺 | 2 |
| | d | 倭繪 | 9 | | d | 表繪師 | 2 | | b | 蟹滿寺 | 2 |
| | a | 永徳 | 8 | | d | 圓山派 | 2 | | b | 興福寺衆徒 | 2 |
| | d | 洋畫 | 8 | | d | 涅槃圖 | 2 | | b | 銀閣 | 2 |
| | a | 光悦 | 6 | | d | 繪面 | 2 | | b | 高山寺 | 2 |
| | a | 宗達 | 6 | | d | 繪圖 | 2 | | b | 山階寺 | 2 |
| | b | 山越彌陀 | 6 | | | } | | | b | 室生寺 | 2 |
| | d | 狩野 | 6 | 2 | | {寺院 | 234 | | b | 深大寺 | 2 |
| | a | 玉堂 | 5 | | b | 中尊寺 | 14 | | b | 親王院 | 2 |
| | a | 大雅 | 5 | | b | 長谷寺 | 12 | | b | 西山光照寺址 | 2 |
| | d | 書齋圖 | 5 | | b | 山田寺 | 11 | | b | 西大寺 | 2 |
| | d | 日本畫 | 5 | | b | 鳳凰堂 | 11 | | b | 石水院 | 2 |
| | d | 浮世繪師 | 5 | | b | 興福寺 | 10 | | b | 川上村運川寺 | 2 |
| | d | 兩界曼荼羅 | 5 | | b | 藥師寺 | 10 | | b | 大徳寺 | 2 |
| | d | 曼荼羅 | 5 | | b | 唐招提寺 | 9 | | b | 知恩院 | 2 |
| | a | 藤田畫伯 | 4 | | b | 一乗寺 | 8 | | b | 智積院 | 2 |
| | a | 寫樂 | 4 | | b | 聖林寺 | 7 | | b | 拇尾高山寺 | 2 |
| | a | 松園女史 | 3 | | b | 本光明寺 | 7 | | b | 東本願寺 | 2 |
| | a | 大觀 | 3 | | b | 金閣 | 6 | | b | 日光東照宮 | 2 |
| | a | 探幽 | 3 | | b | 東寺 | 6 | | b | 法花滅罪寺 | 2 |
| | a | 棟方志功畫伯 | 3 | | b | 根本中堂 | 5 | | b | 法華寺 | 2 |
| | a | 北齋 | 3 | | b | 平等院 | 5 | | b | 本藥師寺 | 2 |
| | b | 當麻曼荼羅 | 3 | | b | 法輪寺 | 5 | | b | 蓮華王院 | 2 |
| | d | 漢畫風 | 3 | | b | 阿彌陀堂 | 4 | | b | 榮山寺八角堂 | 2 |
| | d | 狩野派 | 3 | | b | 河内觀心寺 | 4 | | b | 當麻寺 | 2 |
| | d | 障壁畫 | 3 | | b | 金色堂 | 4 | | b | 眞木大堂 | 2 |
| | d | 飾畫 | 3 | | b | 詩仙堂 | 4 | | | } | |
| | d | 倭繪風 | 3 | | b | 十輪院 | 4 | 3 | | {神道 | 194 |
| | d | 繪畫彫刻 | 3 | | b | 教王護國寺 | 4 | | d | 神道 | 22 |
| | a | 光琳 | 2 | | b | 粟原寺 | 3 | | d | 神像 | 15 |
| | a | 如拙 | 2 | | b | 橘寺 | 3 | | d | 神籬 | 13 |
| | a | 本阿彌光悦 | 2 | | b | 元興寺 | 3 | | b | 外宮 | 10 |
| | a | 廣重 | 2 | | b | 四天王寺 | 3 | | a | 丹生津姫 | 8 |
| | a | 福田平八郎畫伯 | 2 | | b | 中宮寺 | 3 | | c | 古神道 | 8 |
| | b | 山越來迎 | 2 | | b | 本願寺 | 3 | | d | 神樂 | 8 |

| 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 | 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 | 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 |
|----|----|---------|-----|----|------------|----|-----|----|-------|----|-----|
| | b | 神宮 | 6 | c | 幼帝 | | 14 | a | 俊乗坊 | | 7 |
| | c | 宮座 | 6 | a | 花山院 | | 13 | b | 東大寺大佛 | | 7 |
| | c | 大社 | 6 | a | 後鳥羽院 | | 13 | b | 轉害門 | | 4 |
| | b | 皇大神宮 | 5 | a | 後白河院 | | 13 | b | 大佛造立 | | 3 |
| | c | 神敕 | 5 | a | 後醍醐天皇 | | 10 | c | 建久再建 | | 3 |
| | c | 遷宮 | 5 | a | 神武天皇 | | 9 | b | 戒壇院 | | 2 |
| | b | 春日神社 | 4 | a | 持統天皇 | | 6 | b | 三月堂 | | 2 |
| | c | 嚴島神社 | 4 | a | 一條院 | | 5 | b | 正倉院御物 | | 2 |
| | b | 吉田神道 | 4 | a | 後水尾院 | | 5 | b | 大佛開眼 | | 2 |
| | d | 神事 | 4 | a | 鳥羽法皇 | | 5 | b | 大佛建立 | | 2 |
| | a | 玉依姫 | 3 | a | 天智天皇 | | 5 | b | 二月堂 | | 2 |
| | b | 出雲大社 | 3 | a | 天武天皇 | | 5 | b | 八角燈籠 | | 2 |
| | b | 神宮寺 | 3 | a | 文德天皇 | | 5 | | | | |
| | b | 石上神宮 | 3 | a | 桓武天皇 | | 4 | 6 | {建築 | | 156 |
| | b | 丹生川上本社 | 3 | a | 後白河法皇 | | 4 | d | 建築 | | 65 |
| | d | 女神 | 3 | a | 後鳥羽上皇 | | 3 | d | 書齋 | | 17 |
| | d | 神庫 | 3 | a | 後鳥羽院以後隱遁詩人 | | 3 | d | 茶室 | | 13 |
| | d | 神殿 | 3 | a | 仁德天皇 | | 3 | d | 寢殿 | | 11 |
| | d | 神奈備 | 3 | a | 稱徳天皇 | | 3 | d | 日本建築 | | 9 |
| | b | 若女面 | 2 | a | 一條天皇 | | 2 | b | 桂離宮 | | 8 |
| | b | 住吉神社本殿 | 2 | a | 花山天皇 | | 2 | d | 書院 | | 7 |
| | b | 大神 | 2 | a | 景行天皇 | | 2 | d | 木造建築 | | 6 |
| | b | 大神神社 | 2 | a | 嵯峨天皇 | | 2 | d | 大建築 | | 4 |
| | b | 天照皇大神宮 | 2 | a | 崇神天皇 | | 2 | d | 建築家 | | 3 |
| | b | 白山神社 | 2 | a | 崇徳天皇 | | 2 | d | 數寄屋 | | 3 |
| | b | 本宮 | 2 | a | 白河法皇 | | 2 | d | 寺院建築 | | 2 |
| | c | 神魂 | 2 | a | 白河上皇 | | 2 | d | 寺院配置 | | 2 |
| | c | 丹生津姫御巡幸 | 2 | a | 文武天皇 | | 2 | d | 寢殿造 | | 2 |
| | c | 蕃神 | 2 | a | 平城天皇 | | 2 | d | 書院造 | | 2 |
| | d | 宗派神道風 | 2 | a | 履中天皇 | | 2 | d | 本建築 | | 2 |
| | d | 祝詞 | 2 | | | | | | | | |
| | d | 神祭 | 2 | 5 | {東大寺 | | 166 | 7 | {仏像 | | 153 |
| | d | 神樂歌 | 2 | b | 大佛 | | 26 | d | 佛像 | | 25 |
| | d | 神樂面 | 2 | b | 東大寺 | | 23 | d | 佛師 | | 20 |
| | d | 遷宮地 | 2 | b | 正倉院 | | 22 | a | 問答師 | | 14 |
| | d | 道祖神 | 2 | b | 大佛殿 | | 18 | d | 念持佛 | | 10 |
| | | | | a | 公慶上人 | | 12 | d | 佛頭 | | 10 |
| 4 | | {天皇 | 181 | a | 重源上人 | | 10 | b | 飛鳥大佛 | | 7 |
| | c | 天皇 | 17 | a | 東大寺再建 | | 10 | d | 御佛 | | 7 |
| | c | 天子 | 14 | a | 行基菩薩 | | 7 | a | 乾陀羅 | | 6 |

| 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 | 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 | 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 |
|----|----|--------|----|----|--------|----|----|----|--------|------|----|
| | d | 金佛 | 6 | d | 神事藝能 | 7 | | | | | |
| | d | 乾漆佛 | 4 | d | 能面 | 6 | 14 | | { | 觀音 | 53 |
| | d | 南都佛師 | 4 | d | 能樂 | 6 | | d | 觀音 | 22 | |
| | b | 山田寺佛頭 | 3 | d | 藝能者 | 6 | | b | 十一面觀音 | 12 | |
| | b | 千體佛 | 3 | d | 女面 | 3 | | c | 觀音信仰 | 5 | |
| | b | 善膩師童子像 | 3 | d | 能衣裳 | 3 | | b | 聖觀音 | 4 | |
| | b | 八部衆 | 3 | d | 能舞臺 | 3 | | b | 長谷觀音 | 3 | |
| | d | 金銅佛 | 3 | a | 世阿彌 | 2 | | b | 本光明寺觀音 | 3 | |
| | d | 祕佛 | 3 | d | 能狂言 | 2 | | b | 聖林寺觀音 | 2 | |
| | a | 日羅上人像 | 2 | d | 能役者 | 2 | | b | 如意輪觀音 | 2 | |
| | a | 問答師作 | 2 | d | 藝能史 | 2 | | | | | |
| | a | 傳問答師作 | 2 | d | 藝能人 | 2 | 15 | | { | 巨石 | 50 |
| | b | 雲中供養佛 | 2 | | | | | d | 巨石 | 21 | |
| | b | 額田王念持佛 | 2 | 11 | | { | 繪卷 | 59 | b | 石舞臺 | 11 |
| | b | 善財童子 | 2 | d | 繪卷 | 24 | | b | 石造物 | 7 | |
| | b | 方廣寺大佛 | 2 | d | 繪卷物 | 16 | | d | 岩船 | 5 | |
| | b | 藥師如來坐像 | 2 | b | 源氏物語繪卷 | 8 | | d | 岩組 | 2 | |
| | d | 三尊佛 | 2 | b | 駿牛 | 3 | | d | 石造遺物 | 2 | |
| | d | 佛師團 | 2 | b | 鳥獸戲畫 | 2 | | b | 酒船石 | 2 | |
| | d | 佛像佛畫 | 2 | b | 伴大納言繪詞 | 2 | | | | | |
| | | | | b | 寢覺物語繪卷 | 2 | 16 | | { | 豐臣秀吉 | 47 |
| 8 | | {彫刻 | 88 | b | 蒙古襲來繪詞 | 2 | | a | 太閤 | 28 | |
| | d | 彫刻 | 26 | | | | | a | 豐太閤 | 11 | |
| | d | 木彫 | 20 | 12 | | { | 古墳 | 57 | a | 秀吉 | 8 |
| | a | 運慶 | 12 | d | 古墳 | 37 | | | | | |
| | a | 木喰 | 7 | d | 彩色古墳 | 4 | 17 | | { | 城郭 | 43 |
| | a | 圓空 | 7 | b | 茶臼山古墳 | 3 | | b | 熊本城 | 9 | |
| | a | 定朝 | 5 | b | 塚穴山古墳 | 3 | | b | 大坂城 | 6 | |
| | a | 定朝風 | 5 | d | 大古墳 | 3 | | d | 天守閣 | 6 | |
| | a | 運慶一門 | 4 | d | 墳墓 | 3 | | b | 二條城 | 5 | |
| | a | 運慶派 | 2 | b | 西山古墳 | 2 | | b | 伏見城 | 5 | |
| | a | 湛慶 | 2 | b | 妙見山古墳 | 2 | | b | 安土城 | 3 | |
| | | | | | | | | d | 城郭 | 3 | |
| 9 | | {聖德太子 | 76 | 13 | | { | 物語 | 54 | b | 江戸城 | 2 |
| | a | 太子 | 47 | d | 物語 | 31 | | b | 大坂落城 | 2 | |
| | a | 聖德太子 | 26 | b | 源氏物語 | 14 | | b | 名古屋城 | 2 | |
| | b | 太子像 | 3 | b | 平家物語 | 3 | | | | | |
| | | | | d | 御物語 | 2 | 18 | | { | 風景 | 43 |
| 10 | | {芸能 | 68 | d | 物語小説 | 2 | | d | 風景 | 34 | |
| | d | 藝能 | 24 | d | 物語繪 | 2 | | d | 景觀 | 5 | |

| 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 | 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 | 番号 | 分類 | 用語 | 頻度 | | | | | | | | | | |
|----|----------|--------|----|------|----|------|-----|----|----|--------|----|----|----------|------|-------|-----|------|----|-----|-----|----|
| 19 | d | 山水風景 | 2 | 23 | } | 庭園 | 37 | 27 | a | 鐵齋先生 | 30 | | | | | | | | | | |
| | d | 自然風景 | 2 | | | | | | d | 庭園 | 13 | 28 | } | 藤原道長 | 28 | | | | | | |
| | } | {万葉集 | 41 | | | | | | d | 造園 | 10 | a | 道長 | 21 | | | | | | | |
| | | | | | | | | | d | 石庭 | 3 | a | 御堂關白 | 7 | | | | | | | |
| 20 | b | 萬葉集 | 36 | 24 | } | 奈良公園 | 3 | 29 | } | {彩色 | 24 | | | | | | | | | | |
| | b | 萬葉集時代 | 3 | | | | | | | | | d | 庭師 | 2 | d | 彩色 | 13 | | | | |
| | b | 萬葉集成立 | 2 | | | | | | | | | d | 庭石 | 2 | d | 極彩色 | 11 | | | | |
| | } | {文明開化 | 41 | | | | | | | | | d | 禁庭 | 2 | 30 | } | {博物館 | 22 | | | |
| c | | | | 文明開化 | 31 | d | 博物館 | 20 | | | | | | | | | | | | | |
| 21 | c | 文明開化以後 | 4 | 25 | } | 写真 | 34 | 31 | a | 利休 | 14 | | | | | | | | | | |
| | c | 文明開化時代 | 4 | | | | | | d | 寫眞家 | 30 | d | 茶道 | 7 | | | | | | | |
| | c | 文明開化風 | 2 | | | | | | d | 寫眞家 | 4 | 32 | a | 天心先生 | 20 | | | | | | |
| | } | {石仏 | 38 | | | | | | a | 聖武天皇 | 31 | | 33 | } | {大伴家持 | 19 | | | | | |
| d | | | | 石佛 | 27 | a | 陶芸 | 30 | a | 家持卿 | 14 | | | | | | | | | | |
| 22 | d | 石佛群 | 6 | 26 | } | 曜變 | 9 | 32 | a | 天目碗 | 3 | | | | | | | | | | |
| | b | 三尊石佛 | 3 | | | | | | d | 滴珠 | 4 | a | 大伴家持卿 | 3 | | | | | | | |
| | d | 石地藏 | 2 | | | | | | a | 河井寛次郎翁 | 3 | a | 家持 | 2 | | | | | | | |
| | } | {法隆寺 | 37 | | | | | | a | 藤四郎 | 3 | 34 | } | {祭礼 | 19 | | | | | | |
| b | | | | 法隆寺 | 32 | b | 天目碗 | 3 | a | 祭禮 | 16 | | | | | | | | | | |
| } | {法隆寺金堂壁畫 | 3 | 27 | } | } | 油滴 | 3 | 33 | } | {大伴家持 | 19 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | b | 法隆寺再建論争 | 2 | d | 釉藥 | 3 | a | 祭禮着 | 3 | |
| | | | | | | | | | | | | } | {法隆寺再建論争 | 2 | d | 瀬戸 | 2 | 34 | } | {祭礼 | 19 |
| | | | | | | | | | | | | | | | d | 瀬戸 | 2 | | | | |
| } | {法隆寺再建論争 | 2 | 28 | } | } | 瀬戸 | 2 | 34 | } | {祭礼 | 19 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | d | 祭禮 | 16 | | | | | | | |
| } | {法隆寺再建論争 | 2 | 29 | } | } | 瀬戸 | 2 | 34 | } | {祭礼 | 19 | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | d | 祭禮着 | 3 | | | | | | | |

注：a：固有人物、b：固有作品、c：固有制度、d：美術様式

(1) 事項・人物の名寄せについて

表3に表れた事項・人物の名寄せした内訳が表4である。この名寄せの方法は、まず全用語から、同一形態をもつ頻度2以上の用語を母集合とした。次に用語のうち、「美術史」を考えるに特徴的な用語の頻度を数え、原則として13頻度以上の用語を選び用語群の代表とし、それに関連する用語を母体からすべて採取した。以上の操作によって、表4に見られる名寄せした用語群を得た。

(2) 事項・人物の概説

次に名寄せしたものについて、頻度の高い用語群 10 件の概説をする。

1 絵画 頻度合計 286

この用語群には絵画～絵図まで 50 件を入れた。絵画に関係する用語として、固有の絵師や、「狩野派」、「漢画風」のようなスタイルも入れた。「山越弥陀」「當麻曼荼羅」のような「図」「絵」が後接しない用語も、山越来迎図、曼荼羅図として入れた。「棟方志功画伯」は版画が中心だが絵画としてまとめた。光悦、宗達、光琳らは絵師にとどまらないが含めた。

この用語群は最大頻度を持つに至ったが、美術史として「絵画」がそれだけの量幅を持つのは妥当と考えた。

2 寺院 頻度合計 234

中尊寺～真木大堂までの 58 用語を入れた。ここには「仏像」を入れず、固有の建築物として選んだ。ただし奈良の東大寺に関係する大仏や塔頭と明確にわかるものは別途 5 {東大寺} とした。同じく「法隆寺」も別に 22 {法隆寺} とした。これらは独立して扱うだけの頻度があったからである。

「金閣」や「銀閣」、あるいは「詩仙堂」が完成した時代に寺院であったかどうかは分かりにくい、ここに入れた。「興福寺衆徒」は、「衆徒」の切り分け不備によるノイズとみなし、ここに入れた。

日本の美術史に関係する寺院の数は膨大であるが、本論では頻度 2 以上のものを対象としているので 58 件になった。

3 神道 頻度合計 194

神道～道祖神までの 43 用語をいれた。保田は古神道に重きを置いているので、「道祖神」はアニミズムの観点から入れた。「丹生津神」や「玉依姫」は神話的女神の観点からここに入れた。

4 天皇 頻度合計 181

天皇～履中天皇までの 32 用語を入れた。「幼帝」は院政時代にみられた幼い天皇を神のごとく大切に扱い、実際の政務は院庁がとる独特のもので、その様式自体に保田は美を見ていた。

5 [東大寺 頻度合計 166

大仏～八角灯籠までの20用語をいれた。当初は「大仏」を中心にしていたが、「正倉院」「戒壇院」「二月堂」「三月堂」も追加した。人名は大仏殿の再興・復興に関係した人物で、「俊乗坊」は俊乗坊重源上人のことであり、保田は文脈で呼び名を変えていたので、ここにいれた。なお「大仏」については飛鳥の大仏及び方広寺の大仏は7 {仏像} に「飛鳥大仏」「方広寺大仏」として分けてある。鎌倉大仏は頻度が1なので、前提条件によって省いた。

6 [建築 頻度合計 156

建築～本建築までの16用語を入れた。固有の建築物は殆ど2 {寺院} に入れたので、ここでは「桂離宮」だけになった。修学院離宮は固有名としては頻度1だったので省いた。また城はすべて17 {城郭} に入れたので、ここにはない。「寺院建築」と「寺院配置」とは、建築様式の視点からここに入れた。

おもに歴史的な建築様式がこの用語群の中心となった。

7 {仏像 頻度合計 153

仏像～仏像仏画までの28用語を入れた。「問答師」とは、興福寺の八部衆（阿修羅像など）を作ったと言われている伝説のガンダーラ人である。「仏師」や「仏師団」もここに入れたが、「運慶」などは別途8 {彫刻} に入れた。「観音」は特別に14 {観音} とした。

8 {彫刻 頻度合計 88

彫刻～湛慶までの10用語をいれた。ここには主に人名を集め、作品自体は7 {仏像} に分けた。

9 [聖徳太子 頻度合計 76

「太子」は聖徳太子に特定できた。

10 {芸能 頻度合計 68

芸能～芸能人まで13用語を入れた。「能面」「女面」は8 {彫刻} に入れずここに入れた。能楽関係が用語として多いが、実際には能楽以前の芸能が多数ある。

以下 11 {絵巻} ～ 34 {祭礼} については説明を省略した。表 4 の用語群を参照されたい。

4 クラスタ分析

クラスタ分析をつかって、表 4 にある人物・事項にまとめた用語群の相互関係を図化し、図 3 とした。この手法*2については従来行ってきたものである。

4. 1 事項・人物のクラスタ分析

この図 3 (デンドログラム*3) は、4.2 で後述する図 4 (事項・人物地図) が用語の位置情報から、その出現パターンを二次元表示することに比較して、位置情報の隣接度計算から用語集合間の類似性を導き出している。

以下はこれまでの論考で繰り返しのべてきたので、そのまま転用する。というよりも、方法論に変化はない。もっとも注意すべきは、このクラスタ分析手法は用語群のテキスト中における隣接度をパターン化することに目的をもち、その結果に対する意味付けはテキストに直接あたる点にある。クラスタ分析はヒントをもたらす。しかしその結果には確定的な意味連関を持たない。ただし文章とは極端に人為人工の物である。よって執筆者による用語間の意味付け傾向は、これまで顕著に表れてきた。

「その類似度とは、各用語間にどのくらいの隣接共起があるのか、どういう用語が文章の中で隣接して使われているのかという指標である。つまり、そこに意味的な処理はない。結果のデンドログラムに関してテキストにあたり、クラスタ*4の意味を類推し、付与することになる。

本論でのクラスタ分析の目的とは、すなわち、あらかじめ用語の意味を勘案するものではなく、用語間共起の結果として、共起した用語は相互に意味上のなんらかの関連があるかもしれない、と推定する

* 2 谷口敏夫「三島由紀夫『豊饒の海』」の分析に詳しく述べた。

* 3 デンドログラムとは、樹形図と翻訳できる。

* 4 クラスタとは、デンドログラムに表れた、要素間の明瞭な「まとまり」

ことにある。その結果として、分析で得られたクラスターという指標をもってテキストにあたり、そのクラスターの有効性、妥当性を計ることにある。」(谷口の定常見解)

以下に、図3から各用語群の近似や収束状態をながめ、いくつかの解釈をしておく。

絵画は他と無関係にあるが、これは通時的に連続してテキストに表れるので全てに関係し、結果として一般用語の振る舞いをしたことになる。

寺院と仏像とはクラスターを形成しているが、この二つも 絵画と同じ様態なので関係はゆるく、相互に一般用語としての振る舞いを示し、特徴的なクラスターとは言えない。しかし若干の「意味」を形成しているように見える。近接する東大寺は、東大寺大仏として独立していると考えて良い。

次の神道も一般用語化しているが、明瞭なクラスター 建築、豊臣秀吉、城郭に接続しているのが興味深い。これはテキストにあたると、豊太閤秀吉と吉田神道との関係を否定的に論じたところで緩やかなクラスターを形成したことが分かる。

他には、物語、観音、巨石、石仏、風景、庭園などに強いクラスター形成が見られる。これらは意味的に妥当である。しかし 写真、千利休、博物館、大伴家持は「美術史」としての意味がなく、一種の誤差と言えるので割愛した。ただしテキストからは保田の考えや連想形式が分かる。

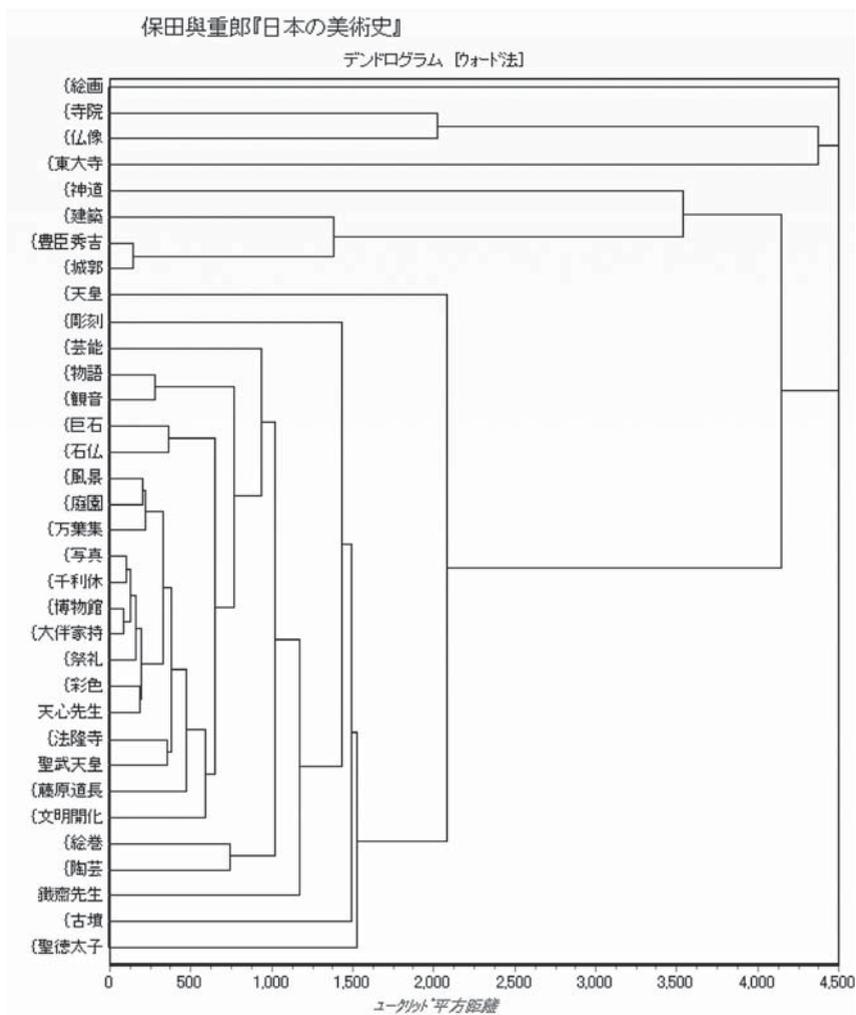


図3 事項・人物のクラスター分析

4. 2 事項・人物地図に表れた小概念

図4は、クラスター分析した結果から得た用語間の類似度による近接の程度を、等高線（地図）の用語並びに適用したものである。具体的には、図の右端上端に表れる項目「|絵画、|寺院、|仏像、～」以下の並びは、図3の左にある項目並びから得たものである。すなわち図4の横軸は文章の通時性によって第1章・大倭朝廷時代の第1節「九千年の輝き」から一意に確定し、縦軸はクラスター分析の結果から、用語間の位置の近接度を用いたものである。

この図4からいくつかの小概念が想定できたので、それをA～Jの10種類にまとめ地図上に付記した。また、他の丸囲いは注目点として付記した。以下、A～Jにそって順次分析する。

A：用語群「絵画」の通時性

小概念Aにまとめたものは「絵画」の通時性での特徴を表している。|絵画は表4から総頻度286と大きな用語群であり、天平、院政、戦国、桃山に高頻度が続き、江戸と近代とで最大の出現をみる。これは宗教的絵画から、権力者の絵画、そして江戸では浮世絵など庶民の絵画、近代に入って富岡鉄斎に続いている。絵画は保田の美術史で他に比して普遍的なジャンルと考えられる。

B：白鳳・天平期における仏教芸術の隆盛

小概念Bにまとめた用語群は{|寺院、仏像、東大寺、神道|}の大きなグループである。これが白鳳、天平の両時代（両章）で明確な固まりを成している。ここで選ばれた各要素用語は大部分一般美術史の中にも現れる作品や用語であり、主に仏教芸術の隆盛期を表している言える。中でも、東大寺大仏への言及は持続して、C、Dと通時的にも明確なパターンを表している。

C：東大寺再建（建久再建・重源上人）

保田は東大寺大仏に相当な筆をさいている。『萬葉集の精神』では万葉集には「仏教」への言及が殆どないことを保田は指摘したが、当美術史では天平時

代（小概念 B）の大仏造営の精神性に強く触れ、それを承けて C では院政時代の東大寺再建について、重源上人の志や信仰心として述べられていた。

頼朝の時の東大寺再建は、天平創建の話とちがって、まだきのふのことのやうな記憶が、わが國の民衆の中に生きてゐた。家持卿が越中の任地で東大寺の勸進使を接待した時の歌は、萬葉集に見えて、如何にも遠い大昔のやうな氣をさせるが、重源上人のいろいろの物語は、きのふの話のやうに新しい。頼朝公より重源上人に親しみあつて身近なのは、芝居小説の影響でなく、やはり信仰とか宗教が國びとのくらしに入つてゐる證といふものであらう。

建久再建の時は、重源上人が宋に學んだ人だつたので、當時の流行からも宋の様式を多く入れたといふ。(07-6 東大寺再建)

D：東大寺復興（元祿復興・公慶上人）

この小概念 D は、B、C を継いで大仏再興にかける人々の通時的な営為を表している。

東大寺は一般と等しなみに寺と云つても、もともと性格の異なる特殊な寺だつた。聖武天皇敕願の國內第一の大寺、國の國分寺の總本山である。平氏によつて焼き滅されたあと、頼朝は鎌倉幕府のなるかならぬかをここに賭して再建した。俊乗坊が總宰し、その規模、天平創建に勝るものを建てあげた。それが戦國の時代、三好・松永の亂にて再び焼亡、大和の長者山田道安が、御首をついだが、應急修理の類だつた。この再建の貞享元祿に至るまで假の御首を備へた大佛はいたましくも露座にいました。公慶上人が、この再建を發願したのは、當然何人かになさねばならぬことを思ひ切つたのである。(13-3 東大寺復興)

E：神道・古神道

保田と神道とは深い関係があるが、意外にも当美術史では絵画や仏教ほどには顕著な用語頻度を示していない。ただ保田にとっての神道とは古神道を指し

ているので、中世の吉田神道以後の体系とは異にしている。それがテキストでは古代に位置する第1章大倭朝廷時代に顕著なパターンを表した要因と考える。

「01-3 庭園の源流」では日本の神の庭の源流を農業をもとにする暮らしの中に求めていた。一方「01-5 皇大神宮」では神の訪れる神聖な場所を齋庭とした。この二つから、古神道がパターンを形作ったと考える。

内宮正殿も申し分ないが、それ以上に遷宮あとの小石の庭——齋庭（イニハ）が、わが心を切なく、いたく、かなしくする。もつとも古い建物の制をつたへるといふ出雲の大社の建物は、古制を變更した度合がつよすぎる感じである。それは後世、人工的に宗教化されたのであらう。(01-5 皇大神宮)

F：豊臣秀吉の桃山美術

保田の豊太閤秀吉への賛辞は熱気を帯びている。日本の美術工芸に関わる華麗な一斉開花を、秀吉の気質になぞらえている。

しかし桃山時代そのものであつた豊太閤といふ人物だけは、言ひやうもない大なる榮光の英雄だつた。その造形感覺到於ても、この人は數千年の人間の全歴史を現前のものにした。大坂城の巨石石組を見て、ざつと千數百年前の大倭朝廷時代の島ノ庄石舞臺を思ひ出した時、そのころの大和人のもつた巨石への思ひ、北九州の古代の人らの石への感動の表現に迫るものは、豊太閤をおいてあとにもさきにもなかつた。～

建築、繪畫、染織、陶磁、金工、漆工、どの一つをとつても、前代未聞の花ざかりだつた。全身をゆさぶられるやうな感動のあふれる風景が、日本國中に展開してゐた。庭も數寄屋も、われらの民家も、みなこの時代に、その最も美しい沈着で高雅な形がつくられた。(12-1 桃山の氣宇)

G：天皇：朝廷の雅

用語群「天皇」は図4では平安時代の「06-4 花山院故事」と院政時代の「07-1

院政の朝廷」にパターンが明らかだが、実際は次の表5のように各章に絶え間なく現れる。

表5：用語群 {天皇の各節頻度} →第1章1節～↓第14章3節→

| | | | | | | | | |
|-----|----|---|----|---|---|----|---|---|
| {天皇 | 3 | 2 | 2 | 4 | 0 | 0 | 2 | 9 |
| 0 | 2 | 1 | 7 | 1 | 2 | 9 | 4 | 0 |
| 4 | 0 | 4 | 0 | 7 | 5 | 0 | 8 | 0 |
| 0 | 16 | 4 | 13 | 4 | 8 | 10 | 1 | 9 |
| 7 | 3 | 2 | 3 | 0 | 6 | 4 | 0 | 0 |
| 0 | 1 | 3 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 1 |
| 0 | 1 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | |

この美術史にあつては、{天皇} はどこかで顕著に用いられというよりも、通時性の強い用語と言える。これは保田が日本美術に対する考えの基本を「朝廷の雅」に置いているからである。

～幼帝をたて、神として仕へたこの時代の宮廷の風は、外形的には以前にないものだつた。文明開化に停滞しつつ莊嚴をつくした天平朝廷の盛儀、延喜天曆の整然とした朝廷の儀式は、院政時代に於ては、神なる幼帝に仕へて「遊び」となる。私はこの「文明」の向上に幾度もくりかへし驚嘆するのである。(07-1 院政の朝廷)

H：芸能

表4の整理番号10番の芸能には、{芸能、神事芸能、～「能関係」・世阿弥～芸能人} まで含めている。能楽を日本の代表的芸能とするなら中世室町時代に顕著なパターンが出ると予測していたが、実際には {世阿弥} は頻度が2と少なく、芸能は鎌倉時代の「08-1 覇者の感情」と「08-3 鎌倉の貧困」とに表れた。

これは、朝廷の風儀や雅が、鎌倉北条執権によって阻害され、^{じげ}地下に流れ出したという芸能観があり、保田の基本的な考えである。

院政時代につくりあげられた王朝文化は、全国の農山村落の民衆の

中へ入つていつた。かういふ文明の流導には多くの理由と条件がすでにととのつてゐた。さうした農村は幕府御家人の扱ひの外にゐて、一かどの力に相當するものを、共同體として保持してゐた。さういふ村から村へ、王朝文化は、まづ一種の藝能として入つた。院政時代の日本の國うちでは、一方では武士がちらちらしてゐたが、他方では各種の神事的色彩をもつた藝能人が、思ひきり徘徊してゐる時代だつた。

(08-1 覇者の感情)

I：古墳と聖徳太子

推古時代の「02-1 古墳」に「古墳」、 「02-2 多彩なる造形」に「聖徳太子」が表れた。推古天皇は西暦 593～628 年に女帝として在位し、甥の厩戸皇子（聖徳太子）を摂政とした。つまりこの時代は飛鳥時代と通称されるが、保田は当美術史で「推古時代」と記した。

櫻井の安倍文殊院境内の西古墳は、古墳時代最後期の作品と思はれる。この精巧な古墳は、清潔といふことを、最も古く最もよく現したもので、さういふ意味では、比較するものがない。平らにきつた石板を、整然と立てならべて石室をつくつてゐる。單純な直線で、矩形の圖形の組合せを描き出してゐるのは、實にさすがしく美しい。石のつぎ目の左右を對應させるために、一枚石に直線を陰刻してゐる。大和の古墳時代の最後の作品として、堂々の力量感を失ふことなく、この清らかな仕上げをしたのは、我々を歡喜させ、また勇氣を與へる。(02-1 古墳)

～鳥ノ庄の石舞臺も、飛鳥の寺や櫻井の上宮寺、斑鳩の法隆寺、難波の四天王寺と續々と建てられてゐるほぼ同じ世代に、(注：酒船石が)建造されてゐたのである。その同じ日に、いくつの古墳の巨石が運ばれてゐたか。(02-2 多彩なる造形)

J：陶芸：曜変天目茶碗

用語群 {陶芸} が室町時代「10-3 書斎」に顕著に表れた。ここには曜変天目茶碗（国宝指定）の美しさやその再現への考えが述べてある。

曜變は、油滴の變則的なものだが、そのあやしく不可思議な美しさには格別のものがある。人力の外のものだ。しかし滴珠の正しさを尊ぶことを専らとしてゐた仲間では、曜變の美しさを見すごしたのであらう。曜變を陶磁第一等と認定したのは、やはり室町時代の美觀であらう。さういふ美しさを発見した心のはたらきは、ある面では、そのもの自體の美しさへの嘆きに合せて、再び求め難いものを思つたのである。(10-3 書斎)

*その他の特異なパターン

大倭朝廷時代の {巨石}、推古時代の {法隆寺}、天平時代の聖武天皇、平安時代の {観音}、{藤原道長}、{絵巻} などが比較的顕著な出現を見せた。保田の {巨石} 文明に対する感覚は独自のものがあるが、なお絵画全般や仏教芸術全般に比べれば一時代に収まるものとして、本書では描かれた。

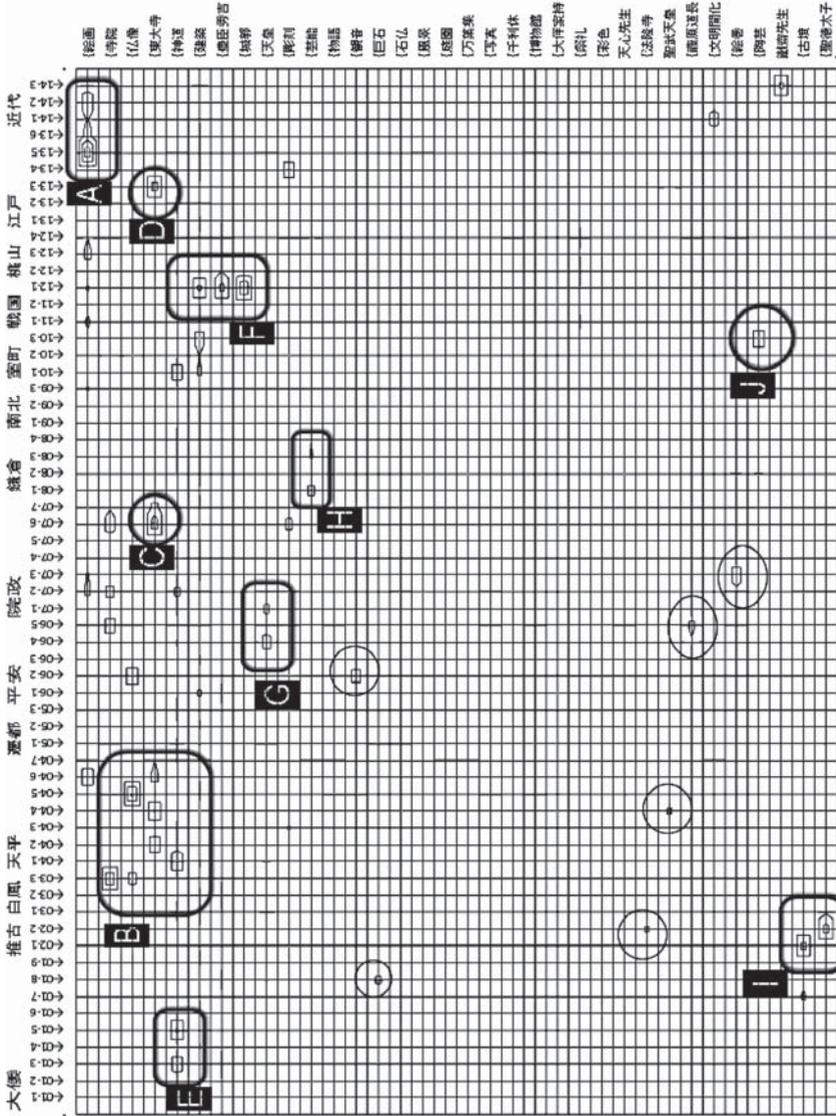


図4 事項・人物地図

5 まとめ

テキスト『日本の美術史』の可視化は、クラスター分析においてはノイズもあったが、そこから得た用語群の並びを適用した図4「文章地図」によってテキストからA～Jの10のまとまった「小概念」が得られた。

それに至る経緯は、まず3.1でテキストに用いられている事項・人名用語を粗く抽出し、おおよその傾向をみた。図1の円グラフでは、明瞭に「日本・文明観」が30%の比率を占めていた。これはテキストが観光ガイドブックであるよりも、保田の血肉化した日本美術に関する思想の書であることを示唆していた。

図2ではこの用語群を地図化した。右軸の◎日本文明観や、◎美術工芸が、第1章から第14章まで間断なく表れる。南北朝、室町、戦国時代で全ての用語群においてパターンが消えるのは、この三章の節数が他に比して少ないからである。本文でも言及したが、少ない事実は他に比較して保田の美術史的関心が低いと考えて良いだろう。これは通時的な分析である。

他方共時的には、第1章「大倭朝廷時代」と第4章「天平時代」に、右軸にあげた5つの用語群がすべて高い頻度を持っていることがわかる。これからみると、保田の大倭朝廷時代、及び天平時代に対する関心の深さがよくわかる。

次に3.2では、この事項や人物の詳細な異同を調べ、事項・人名を表3にまとめた。この内訳詳細は表4にあり、頻度の高い上位34件を調査対象とした。各用語群についてはその要素用語の選別に一般美術史とは異なる観点もあるが、保田のテキストに即して決定した。

4.1ではこの34件の用語群をクラスター分析した。方式としてはユークリッド平方距離及びウォード法によって用語間の距離を示したデンドログラムを得た。この分析方式の選択によっては、デンドログラムが改善される場合もあるが、一貫して使ってきたのでそのままにした。

そこからは、目立った大クラスターを得られなかったが、小さく明確なクラスターがいくつかあり、この分析による用語群の配列に一定の確度をみた。

たとえば {建築、{豊臣秀吉、城郭}}、{物語、観音}、{巨石、石仏}、{風景、庭園} などに特徴が表れ、秀吉の城を建築の雄渾さととらえ、観音信仰を平安時代の物語の中で解き、明日香に見られる巨石文明の中で路傍の石仏を考え、作為的な庭園よりも日常の中に風景として庭を見るなど、保田與重郎の独特の美観がこれらのクラスターに明瞭に表れていた。

最後に4.2で、同じ34件の用語群を地図化し図4を得た。文章中の用語頻度を等高線であらわす「文章地図化」の要点は、テキストという時系列にそった流れは一意に確定できるが、用語群の配列をどうするかが問題であった。本論を含めた一連の考究では、それをあらかじめクラスター分析によって、用語の位置情報から用語間の類似・近接度を計算し、その結果で対象用語群を並べる方法を確定している。

今回もその方法を用いて、A～Jの10のまとまり、すなわち「小概念」を得た。この小概念の連続や分布によって、テキストの全体構造を可視化したと言ってよい。

この10の小概念のうち比較的明瞭なA～Fについて説明し、本論全体のまとめとする。

1. 「A：絵画」が保田の美術史にとって重要である。

絵画は図4から比較的通時性が強く、現代に近い江戸時代で大きなパターンを描いている。テキストには蕪村や若仲などの著名な絵師も述べられているので、江戸時代以降の、それまでの宗教性から離れた庶民的な絵画への移行に、保田が関心を持っていることが明確になった。

2. 「B・C・D」と天平およびそれ以降の東大寺大仏殿を美術史と国民性の両面から捉えている。

保田は、天平時代の東大寺（大仏）に止まらず、その再興、復興に日本美術の厚さを指摘している。聖武天皇創建時もそうだが、鎌倉、江戸の大復興は権力者によって為されたというよりも、それぞれの人を得て民衆の力を結集して作った。つまり美的な繊細さとか芸術性の前に、人々の信仰心や志の力強さを

美的に評価したと言える。

3. 「E：神道」とは古神道をさす。

保田にとっての神道とは、原初神話時代の古神道をさすことが、このパターンによって明瞭と言える。宗派神道への言及もあるが、中心は古神道である。そして、その全体雰囲気伝える物として、より古いと言われる出雲大社よりも、皇大神宮（通称・伊勢神宮）の遷宮跡地に最大の美的関心を寄せている。テキスト初版の冒頭は、唯一カラーの遷宮跡地であることもその現れ的一端であろう。

4. 「F：豊臣秀吉」の桃山文化は城郭にある。

保田は、秀吉を美術史の上で高く評価している。一人一人の芸術家をみるよりも、その時代全体に影響力をもたらした秀吉の感性に関心を示した。クラスター分析で得られた「建築、[豊臣秀吉、城郭]」は、この文章地図でくっきりと姿を表した。

以上で本論を終えるが、追加して「04-5 乾陀羅びと問答師」に表れた天平時代の伝説の問答師に関する保田の筆致が非常に印象に残った。興福寺の十大弟子や、阿修羅像などの八部衆を作った仏師として伝承が残るガンダーラの人である。保田はすでに20代に「問答師の憂鬱」という小説を残しているが、印象深い。谷崎昭夫によれば、この小説作品をもって保田の天平文化への主調であると記されていた。（注：全集第一巻にあり谷崎は解題を担当している）

謝辞

データの整理について、葛野図書倶楽部・坂口昭代副長 2003 の助力に感謝いたします。